
真の大地

木上冷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真の大地

【Zコード】

Z0313D

【作者名】

木上冷

【あらすじ】

遙か昔、終末戦争が、世界を焼き尽くしたという。すべては無に帰つたかのように見えた。しかし、その中で、かつての美しかつた大地の面影を残す、小さな谷があつた。わずかに残つた人間は、その地を巡つて、争い、そして再び過ちを犯す。人は戦わずにしてはいられないのだろうか。

おこれるものも、いつかは滅び行く。栄華を極めた人類もまた、例外ではなかつた。

自らを、己の欲望と憎悪が、滅ぼしたのである。

宗教の対立、思想の対立、資源を巡る対立。いつの時代であつても、すべての対立は人間を、戦争に走らせた。

そして、遙か遠い昔、すべてを無に返した終末戦争は、六つの大陸すべてを焼き尽くしたのだといつ。

わずかに残つた哀れな人間は、己の過ちを、悔いるに十分な世界を見せられた。

荒涼とした山々は、四季を通してその表情を変えない。そして外界からの接触を拒むかのごとく、高くそびえている。

その山を越えると、小さな谷がある。そこには、あたりの荒れ果てた風景とは相異なる、遠いかつての面影を残す、豊かな縁と、肥沃な大地が残されていた。そこに暮らす人々はその恩恵を享受し、つましいながらも、その大地を、力強く、踏みしめるように、この時代を生き抜いていた。

「キヌコおばあちゃん、そんなところにいたちや、風邪ひいちやうう。」

幼い少女が、丘の上に立つてゐる老婆に声をかけている。

「風がでてきたよ、嵐がちかいね。さあ家へ帰るよ。」

老婆は少女の手を引いてひまわりの咲く丘を下つていつた。両脇にある田畠では、農夫が汗を流していた。季節は収穫の時期を迎えていた。

「ノブコちゃん、ノブコちゃん、もう寒いからはやくいらしゃいな。

麓に着くと、少女の母親がそうせかす。

「もう、おばあさま、そんなに長い間、つれまわさないでください。

「おやおや、それはすまなかつた。」

老婆はそついつてわざかにほほえむと、その足で、この谷の首長、ユタカの家へと出向いた。

この老婆、キヌコは、この集落一の年配者で、この村のことを、おそらくは、一番熟知していた。

集落の中央に位置する首長ユタカの住居は、他のそれとは、屋根の色、で区別をしていた。

緑の屋根をしたこの家は、首長の家にふさわしく、一回り大きい。「なんのようだ、キヌコ。」

「嵐が来る、大きな嵐だ、この村ももう終わりに近いね。」

「何の話をしてるんだ？ 嵐はこの時期にはつきものだらつ。」

ユタカはまた、このボケかけている老婆の戯言を聞くのかと、心底うんざりしていた。

「違う、嵐と言つてもね、ただの嵐じゃないんだ。南のほうから、不吉な気配を感じるよ。」

「おう、そうかそうか、それは大変だ、だからひとまず帰りなさい。」

「そついつて首長は、キヌコを追い払うかのように家から出した。去年も、この老婆は、地震がくる、雷が落ちる、火事が起きる、と大騒ぎをしては、村を混乱させたからである。

追い返されたキヌコは村のはずれにある、家へと戻った。

家へと着いたキヌコは、そのまま、火がたかれているその前で、これから来るであろう災難を占つた。

暖炉の中で火が黄色く燃え、尽きた木炭が音を立てて崩れたとき、キヌコは表情を、さらに険しくした。

「やはりだよ・・・。」

キヌコは息子にそういった。

「何がですか？お母さん。」

「今、（南方から災いあり。かくして、大地、人、獣、皆滅びぬ。）とお告げになつた。嵐が来るんだ。さあ大変だよ。」

「嵐？お義母さん、大丈夫ですよ、こんなに夕焼けがきれいじゃないですか。嵐なんて来やしませんよ。」

そういうて、息子の嫁は、窓の方を指さして笑つた。

そうである、息子の嫁が言うとおり、時は既に、夕刻となつていた。嫁がきれいだといった夕暮れの太陽は、遠くの彼方を、不気味なほどに赤く、染めていた。

老婆は、うつむき加減に、一言、つぶやいた。

「嵐は、来るよ、絶対に。」

序章（後書き）

初投稿となります。レベルの低い物語となってしまいそうですが、なんとか続けていきたいと思っています。

嵐は確実にその時を待っていた。

谷から南へ数百キロ先に、寂れた都市がある。そこへ暮らす人々の暮らしぶりは、その街の景色から容易に想像できた。

その都市を首都とする国、（新天地）は、あの忌まわしい戦いを生き延びたある人間が、不毛の地と化したこの場所でこの先暮らしていくために、同じくして生き延びた人々を率いて、建国したと伝えられている。長きにわたり、人々はこの地を住みよい土地へとかえるべく、最大の努力をしてきたが、いつこうに改善は見られなかつた。

国民は疲弊していた。

「国民の生活は既に困窮状態にあるのだ。早急に計画を実行しなくてはいけませんぞ。總統。」

「提督、この計画は失敗が許されないのですよ。時期を見誤れば大変なことになるでしょう。」

この国の建国者の子孫で、國家元首のヒラタは、この計画の第一の立案者である提督に、不信感を覚えずには居られなかつた。

總統の横にいて、總統ヒラタの2倍はあるかのようないた漢の男は、總統の意見に耳も傾けない様子であつた。

その男、提督ダイジ＝スズキは、叩き上げの軍人であり、また野心家でもあつた。總統の予想通り、実際には、ダイジ＝スズキは、国民の疲弊の改善など、全くといって眼中にはなかつた。

彼には、今、多大な野心そのものしかなかつた。

「いや、總統、提督の言うとおりです。国民の生活を考えれば、この計画もやむ終えないでしょう。」

「總統、私も提督に賛成します。」

周りにいた参謀たちは、提督の本心は知つてか知らずか、皆、彼に

賛同している。

「それでは、きまりのようだな。」

提督は満足げに言つと、大きく椅子にもたれかかった。

*

街では、人々が口々に、これから軍隊がどこか遠方に出兵するのだ、と噂にしていた。

少年兵で、街の警備を任されている力ガヤは、面白くなかった。下つ端であるけれども、自分は軍に所属している、という自負心があつた彼にとって、軍の重大計画を、町人が知り得て、軍人の自分が知らない、ということが、腹立たしかったのだ。

力ガヤは、噂をしていた老父を捕まえて、問い合わせた。

「おい、お前、ちょっと待て！」

力ガヤがそういうと、老父は一瞬、顔を強ばらせたが、声の主が少年の兵であることに多少、安心したようだつた。

「お前、軍についての噂を流布したな、罰金だぞ。それが嫌なら、今ここで、その噂を正直に言え！」

「そんな兵隊さん、厳しいこと言わんでください。それにあなたは兵隊さんでしょ、なんでわしに内容を聞くんです？」

「・・・僕はまだ下つ端だから知らないんだよ、だから、・・・早く教えてくれよ！」

老父は、この下つ端少年兵が滑稽で仕方がなかつたが、罰金だけは避けたく思い、噂を彼に伝えた。

「兵隊さん、あんたは、ここから北の方角にある、山に囲まれた谷を知ってるかい。そこはここのような、荒れたところじやなくてね、わしも見たことはないが、緑溢れる天国みたいなところらしい。大提督様は以前から、そこに我が国を移そうとお考えのようだつた。そして明日、軍の一次部隊が、谷へと出発するんだ。」

力ガヤは目を輝かせた。幼い頃、母から聞いた、かつての大地。母

も、祖母も、曾祖母も見たことがない世界。そんな世界がもうすぐ見られるんだ、と彼は興奮した。

*

「提督、事はすべて順調に進んでおります。」

提督の右腕であり、頭脳明晰な男として、軍内部からも一目置かれている、大佐アッシュ＝キノシタは、窓から街を見下ろしている提督にそういった。

「よくやったキノシタ。民衆の様子はどうだ。」

「はい、提督への支持は、とどまるところを知りません。」

「それは都合がよい。あほな奴らだ。後は總統をどうにかしなくては。」

「お任せください。提督。」

そういうと、大佐は部屋を後にした。

窓から見える夕日の光が、部屋の中に差し込んでいた。雲のない今日の空は、遠く、谷を囲む山々まで見ることが出来た。提督はそんな景色を眺めながらひとり、椅子に腰掛け、これから的发展に、思わず、笑みをこぼした。

一 章 計画（後書き）

第一話です。まだまだ書きたいことがうまく表現できません。

谷の夜明けは、いつも寒い。なおむか、今は、冬の足音が聞こえる季節であった。

その朝、谷の首長、ユタカの娘マイコは、不快な声で目を覚ました。

「谷の者、よく聞け、今日は嵐がくる日だ、氣をつけろ!」

谷の年長者キヌコが、街の中央にある広場で、大声を張り上げて、叫んでいた。

しかし、谷のたいていの人間は、またボケた老婆が何か騒いでいる、としか思わなかつた。

騒ぎにみかねた首長ユタカは、表に出て、キヌコをなだめ始めた。

「ふう、あの婆さんには困つたものだな。」

朝食の時間にユタカはそついつて、ため息をついた。

「嵐つて何の事かしら、ただの嵐なら、この時期なら当然でしょ。」

「ボケかけた老人の戯言だ、意味もないわ。」

ユタカはそう娘に言つと、裏庭にある、畠を見に行つた。

父親が出て行くのを確認したマイコは、

「私も出かけてくるね、ママ。」

「コースケ君によろしくね。」

マイコの母親は、そついつて、ニヤリとマイコに笑つた。

「いやよママ、そんなのじや無いよ。」

そう言つてマイコは、家を駆けだしていつた。

今日は、谷の青年、コースケとの密会の予定だつたのだった。もちろん、父親は知る由もないのだが。

いつもの密会場所は決まって、丘の上の小さな小屋だつた。少し早めに着いたマイコは、遠くの景色を眺めた。今日は、昨日に引き続きよく、晴れている。

生まれてからずっと、この谷で暮らすマイコにとって、谷の向こうの、荒れ果てた世界は、想像すら、出来なかつた。まして、人がそこに暮らしていることさえも、である。過去の戦争は聞いたことがある。しかしそれは、あくまで他人事のように、思えた。

しばらくすると、青年コースケが丘を駆け上つてきた。この青年は、村の農夫の一人息子だつた。

お互に結婚を考えていたが、マイコの父親が反対することは、目に見えていたので、言い出すことは、出来ていなかつた。

「待たせた？ 親父の仕事手伝つててさ。」

「ううん。大丈夫。」

そういうつたあと、一人は青空のもと、長い間、会話を交わし合つた。

時刻は正午を迎えていた。今朝騒いでいたキヌコは、あまりに興奮したため、寝込んでしまつたといつ。

丘の麓で別れたマイコは、自宅に戻つた。ユタカは居間でくつろいでいる。

マイコは丘を下るとき、青年コースケとの関係、結婚の意思を伝えようと、心に決めていた。

そして、いざ父に伝えようとしたとき、外から悲鳴にも近いような、叫び声が聞こえた。

「み、南から軍勢がつ、（新天地）軍と思われる軍勢がこちりに向かつて来ています！」

それは南側からの、谷への道を守る、衛兵からだつた。ここまで疾

走ってきたのか、事を伝えるなり、広場に倒れ込んだ。コタカはすぐに表に出て、衛兵に近寄つて、訪ねた。

「本当に（新天地）軍なのか？それは確かか？」

「は、はい、確かに見ました。」

「わかった。報告、ご苦労であった。」

そう言うなり、コタカは顔を険しくして立ち上がり、衛兵からの報告を聞きつけ集まってきた、谷の者達と話し合つた。

「（新天地）軍が、なぜ？」

「何が目的なんだ？」

谷の者達は口々に、そう聞いていた。その中、コタカは階の中央に出た。

いいか、お前達は、いわば、平和ボケしているのだ。谷の外の荒れ果てた世界は、この谷に住む我々には想像し得ない世界なのだ。彼らは、そこに暮らしておる、生きていくだけでも困難な生活だ。生きるために、どんなことでもしてきただろうし、そしてこれからもするだろう、そして今、彼らはこの谷を、生きるために必要としているもかもしれない。しかし、言うまでもなくこの谷は、我々の谷だ。何としてでも、守り抜かねばならない。谷の者、戦いになるときは、覚悟、してくれ。

ユタカがそういうと、皆はしばらくの間、静まりかえった。

その静寂を破ったのは、娘マイコだった。

「・・・これって、侵略？」

ユタカは深くうなずいた。

「そうだ、これは侵略なんだ。・・・嵐が、来たんだ。」

一章　密会　（後書き）

第三章は、かなり苦労しました。出来にはまだまだ満足できませんが。

提督、ダイジ＝スズキの朝は、いつも早い。まして、今日はなおさらである。

谷へ遠征する、軍の第一次部隊は、もう既に、その準備を整えていた。

長年思い描いてきた、彼にとつての最高の舞台は、もはや、その幕を開けを、迎えていた。

「提督、部隊の準備が完了しました。いつでも出撃可能であります。」

大佐アツシ＝キノシタは、ダイジ＝スズキにそう伝えると、部隊の待機場所へと戻っていった。

この第一次部隊を、今回率いるのは、他ならぬ、ダイジ＝スズキその人であった。

彼は長らく、戦いの第一線からは退いていた。しかしながら、彼には今回、この計画だけは、自ら出向く、必要があった。

「ねえ、私も連れて行つてくださいない？美しい自然には、美しい私が必要でしょう？」

そういうのは、提督の愛人、ミヒコ＝カミムラであった。美しい私、というのは、一概に、その高い自尊心から発するのではなく、実際に軍内部からも、その姿には、高い評価を受けていた。そして、その美女の本心は、全くもつて、提督など、眼中になかった。

ただ、軍のカリスマである提督の寵愛を受けているという、そのステータスが、彼女の目的だった。彼女の愛は、常に、彼とは違う方向に向いていた。しかし、そんな彼女の内面を、彼は知るはずもなかつた。

「戦場は女の居るところではないのだ。お前を危険にさらす訳にも

いかないしな。」

「あら、今回の出兵がどうして危険なの？相手は、たかが五千人足らずの小さな集落なのよ。すぐに征服できるわ、そんな所。それに、万が一の時には、貴方が守ってくれるでしょう？」

ミエコはダイジの首まわりに手を回し、その身体を彼に寄せ、その美しい声で、そういった。

「しょうがない奴だな、わかつた、連れつてつてやる。」

女に多分に弱い、この提督は、結局自身の愛人を、戦場に、連れ立つことになった。

この都市の中央部には、開けた、大広場がある。今日は一点の曇り無く、太陽の光が、広場の地に、煌々と、降り注いでいた。そして、今そこに、これから出兵する、第一次部隊が、待機していた。

この第一次部隊は、軍の精銳から集められたエリート部隊であった。その点から見ても、この計画、この出兵に対する、軍の意気込みが、感じられた。

しばらくすると、總統ヒラタ、それに引き続き、提督並びに軍幹部が、部隊全員の前へ出てきた。

先ず、總統ヒラタが、部隊に、出陣に際しての、挨拶をする予定となっていた。

總統ヒラタは、穩健派の總統として、知られていた。事実彼は、もともとこの計画には反対の立場を、とつていた。この計画は、侵略に値する、と考えていたのだ。しかし、国民が困窮しているという、提督の進言を受けた總統は、とうとう、この計画を認めた。

しかしこの挨拶には、彼のその穩健さと、この計画に対する若干の後ろめたさが、多分に、現れた。

今、我々は、重大な、国家の危機に直面しています。あの忌まわしい戦争以来、私たちの先祖は、この地で、絶えまぬ努力をしてきました。しかし、国民の現状は、既に人間の生活の限界を越している！あの谷は、最後の希望なのです。しかし、皆さん、これだけは忘れないで下さい。この出兵という決断が、決して安易なものでは無いと言うことを。そして、あの谷にも、また我々と同じ、人間が住んでいるんだ、ということを。これは侵略では無いのです。あなたの方の、健闘を、祈ります。

部隊から、そして広場の周りの聴衆までもが、一斉に拍手した。提督は、ただその様子を、彼の横で静観していた。それに続いて、提督が、訓辞を述べた。

一次部隊の諸君、まず君たちに、おめでとう、と言つておこう。君

たちは選ばれし者だ。諸君は知っているだろ？が、かつてあの戦争下を生き延びた、偉大なる我が建国者、ミツラ＝サトーは、今まさに、君たちのいるこの地で、この国をお建てになつたということを。その時、偉大なる建国者は、この国を、（新天地）とお名付けになつた。この地が、この国が、人類にとっての、新たなる天地になるよう、という願いからである。我が国の精神は、常にこの願いにあるのだ。

あの谷は、緑溢れ、動物たちが戯れる地上の楽園であると聞く。そうだ。まさに谷は、我々の求め続けた、新天地、そのものではないか。遠くない未来、建国以来の我々の願いは、叶うであろう。既に、新たな大地、そして新たな時代に、我々は、足を踏み入れようとしているのだ！全ては諸君にかかる。ともに、新たな時代を創ろうではないか。では、諸君の健闘を、祈る！

提督の訓辞は、より力強く、そして、より勇ましかつた。これから出陣に向かう兵士にとって、ただ、稳健な言葉よりも、そのように勇ましい言葉の方が、いつそ彼らの心に響くものがあつた。聴衆の者、軍関係者、全てが、割れんばかりの拍手喝采を、彼に浴びせた。それは、もはや国民の支持は、総統よりも、提督にあることを、明らかに示した。

提督は、己の演説と、その拍手に、酔いしれていた。全ては、彼のシナリオ通りだった。

そして、総統ヒラタは、自らの地位そのものが、彼によつて、脅かされていることを、今更ながらに悟つた。

そのあと、部隊は、盛大な見送りを背に、ひとつひとつ首都を離れ、谷を田指し出陣した。

兵士は皆、これから見る新たな世界、眞の世界が待つて いるのだ、と田を輝かせて いた。

そんな中、国境を出たその付近で、ふと、先頭をいたダイジ＝スズキの耳に、少年の声がした。

「お、俺も、連れてって、トセー！」

三 章 出 征 前編（後書き）

ただただ、大変でした！
(11/17) サブタイトル変更

四章　　出征　　後編（前書き）

前編のあらすじ：

いよいよ谷へと出征することになった（新天地）軍、第一次部隊。国境付近で、提督、ダイジ＝スズキは、ある少年の声を耳にした。

その少年は、息を切らしそう言つと、提督を仰ぎ見た。

「何だ小僧、この方を誰と心得る！」

提督の護衛兵2人が、慌てて少年を追い払おうとする。

「まあ待て、私は少年と話をしているのだ。ところで少年、まずは名を名乗るべきではないかな？」

提督は、にこやかに、そういった。

「し、失礼しました！私は、（新天地）国民義勇軍三等兵、力ガヤであります！先ほどの、ヒラタ大總統様の御演説に、大変感銘を受けました。今、我が国が面している、未曾有の危機を解決するのは、あの谷との、共存の他ないと思います。どうか、私も、この出征に参加させてください！」

「おのれ、黙つて聞いておれば、提督殿に向かつて、よくも偉そに、そのような戯言を！」

護衛兵は、少年力ガヤに、飛びかかるうとする勢いだつた。

「おい衛兵、騒ぐな、こいつだつて我々の軍の同胞だ。ところで力ガヤ、おまえは、あの谷へ一緒に行きたいのか？」

「はい、そうであります。我が国の未来を左右する、希望の大地を、この目で見たいのです。」

提督ダイジ＝スズキは、本来なら、力ガヤを即、処刑しても、おかしくない、はずであつた。

あれだけの雰囲気、あれだけの拍手喝采の中で、力ガヤは、總統の挨拶に、感銘を受けたというのだ。どれだけ鈍感な少年であろう。事もあるうに、それを提督の前で、言つたのだ。

しかし今でも、力ガヤが提督の前にいる事が許されているのは、提督の、天性とも言える、人を見分ける、その目のおかげであつた。ただの将校であつた彼の、ここまで出世には、多分に、その目が

役立ってきた。

この少年兵は使える。こいつが言つ、くだらぬ共存主義などに惑わされたのではない。その主義を、俺が、利用するのだ。こいつの鈍感さは、利用するには都合がよい。そして、使えなくなれば、捨てるのみだ。

「ふむ、貴様、良い目をしてるな。よし、一緒に来い。共に希望の大地をこの目で見ようではないか！」

「はい！本当に有り難うござります！精一杯頑張ります！」

そういうとカガヤは、部隊の列の、最後尾についた。カガヤがつくのを確認すると、護衛兵たちは、驚きの表情で、お互の顔を見合わせ、こう言った。

「いいのですが、提督、あとでいろいろと面倒なことに・・・」

「かまわん、衛兵の分際は黙つておれ！たかが少年兵一人など、どうにでもなるのだ。」

護衛兵は黙り込んだ。

「部隊全員に告ぐ。今、我々は、大きな味方を得た。若き同胞、カガヤ君が、急遽、部隊に加わることになつたのだ。年齢は若いが、才能に満ちた少年であるから、皆、宜しく頼む！」

提督がそう言つと、再び部隊は出発した。

時は今、日の入りの時刻を過ぎた。部隊は、国と谷の中間に位置す

る、不毛の大砂漠に入っていた。ここは、何の頼りもなしに立ち入ると、一度と帰れない、と言われている。

事実、この大砂漠が、国と、谷を、長年の間、隔絶させていた。部隊はこの砂漠の中を、夜間は進行出来ないとして、ここで一夜を越すことになった。カガヤは直ぐに、キャンプ設営にあたった。

「お~い、新入りかい。宜しくね~。僕はツトム=コンタつていうんだ。」

同じくして、キャンプ設営をしていた、陽気な男、コンタが話しかけてきた。

「は、はい。宜しくお願ひします。」

カガヤは、この部隊が精銳で構成されている、と聞いていたが、この男を見ると、疑いたくなつた。コンタはそんな、ひどくとぼけた男であつた。しかし、カガヤが、この男の真の実力を知るのは、大分あとになつてからのことである。コンタはカガヤに息つく暇も与えず、しゃべり続けた。

「あなたは何でこの部隊・・・」

「そうだね~あの提督ってのは、うん、すごいね。あれだけの志持つた人いないよ、本当。あつ、相手してくれませんね、いいです、次行きます。・・・でもさ、すごいぜ~。」

長い間、こんな調子でしゃべり続けたコンタであつたが、カガヤも、それほど嫌ではなく、むしろ彼から発せられる話は、どれもカガヤにとつて、新しいことばかりで、軍内部の実情など、内容は多岐に渡つた。

「はい、カガヤ君、提督の愛人の名前は?」

「い、いや知りま・・・」

「ミエコだね~、あ、知らなかつたの?こんなに噂なのに?遅れるな~君は。実際この遠征にも、ついてきてるって話だぜ、マジで。やばいですね。」

「へえ~ そなんで・・・」

「ほらほら、手が止まってるよー。」

そのような中、テント設営は終了した。コンタは、作業に疲れたのか、それとも話したことによれたのか、早々にテントに帰つていつた。しばらくすると、星が、夜空に輝きを添えていた。カガヤは、その星空を見上げた。

「この星は、国では見られないな。でもきっと、あの谷の人たちは今、この星を見るんだろうな。」

夜の砂漠は、意外にも、一段と冷えた。カガヤも、明日に備えるため、テントへと戻つていた。部隊の皆が、寝静まつた。それと同じ頃・・・

キャンプ地から少し離れたところで、二人の男女が会話を交わしていた。彼らを照らすのは、砂漠の夜空に輝く、月と星だけだった。

「ねえ、どうして、どうしてこの私が、こんな苦しい思いをしなくちゃいけないのよ。」

女が男にそうせまる。

「そう言わないでくれ、俺だって辛いんだ。でも状況を考えて『ぐらん？君はあのゴミみたいな奴の、愛人、だろう？』

「でもそうだったから、あいつの側にいたから、あなたと・・・女は男の胸に顔を押し当てて、泣いていた。

「わかるてる。それを言つた。今日は、久しぶりに一人きりになれるんだ、今、この瞬間を大切にしようよ。」

「・・・そうね。」

そう言つと、二人はお互ひの愛を、交わし合つた。夜は更けていつた。闇は一人を、隠すように覆つていつた。

駄文の膨張は留まることを知らず、2部構成となつた今回でした。・。
・。暗くなりがちなこの物語に、陽気なキャラクターを、というこ
とで登場したコンタですが、流れからひどく浮いております。・。
上手くいかないものです。それでも大分話は進んできました。
これからも、頑張りますので宜しくお願いします。

谷の衛兵からの報告があつたその日、谷は、大混乱に陥つた。敵がこの谷を攻めてくるんだって。

皆殺しにされるらしい。

噂は、たちまち谷中に広がつた。首長を始め、谷の有力者たちは、急いで年長者キヌコの家へと集まり、今後の方針を練つた。

「谷中がパニックに陥つています。」のままでは、さらに危険です。加えて、襲来の際は、我が集落が、一番最初に相手と遭遇するはずです。援軍を要請します。」

そういうのは、谷の入り口に、ほど近い集落の代表、ヒラヌマだつた。

「谷中の混乱については、この会議が終わり次第、すぐに全住民の集会を開いて、現状を話そう。援軍についても検討しよう。」

ユタカはそういうと、未だ寝込んでいるキヌコを起こして、話しかけた。

「キヌコ、お前のお告げを信じなくてわるかつたと、本当に後悔しているよ。しかし村は危機的状況だ。どうすればよい?」

「ふん、何を今更騒いでおるのじゃ、お告げの通り、この谷は皆、滅びるのじゃ。助かる道など無いに等しい!」

「しかし、このままやられるの待つのでは、あまりにも・・・!」

キヌコとユタカは、そのようにして、長い間、話し合ひ続けた。

「・・・砂漠と谷を結ぶ、山間の道は、ひどく狭い。軍隊も一列に編成して進行するであろう。あの道の両側は急傾斜の崖になつておる。少數の者で待ち伏せして、よこから不意をつけば、多少相手を驚かすことはできるだろ?」

それは、この谷の地理に精通している者ならではの、考えだった。

「なるほどそれは氣づかなかつたぞ。それは良いアイデアだ、キヌ

「しかし、そんなことをしても、必ず滅びるのは明白じや。無駄なあがきはよしとくれ。」

キヌコはそういうと、また寝込み始めた。

「確かに、その作戦はうまくいきそうですが、首長。」

「作戦を実行する者を選ばなくてはいけないな。すぐに取りかかるう。」

会合のあと、首長達は、谷全員を集めて、集会を開いた。

「皆わん。いま我々の谷は大変な危機に瀕しております。（新天地）軍が、南の方角から、攻めてきている模様です。何もしなければ、この谷はすぐに占領されてしまつでしょ。騒いでいても、なにも変わらず、何も始まりません。だから皆わん、この谷を守るために、立ち上がりてください。立ち上がるべき時は、今しかありません！」谷中の者達は、一様に不安な様子であった。しかし戦わなければ、占領されてしまつことが明白なのは、誰もが知っていた。

ユタカは続けて、さきほどの作戦について、述べた。

「我々は作戦を練りました。南口の道から奇襲する作戦です。この作戦がうまくいけば、相手に相当のダメージを与えることが出来るでしょう。その作戦を実行する者達を、我々が、選ばせて貰いました。危険な作戦ですが、彼らには活躍して貰わねばなりません。その者達は、彼らです。」

その時、首長の娘、マイコは、はつとした。

それだけはイヤ！ いかないで・・・

集会後の様子は、様々であった。

不安な様子である者。

自分の家族が、作戦に関わらなくて、ほつとしている者。また逆に

選ばれて、悲しんでいる者。

愛する者が、危険にさらわれることで、悲しむ者。

それは、谷全体に、暗い影を落とした。

そのあと、作戦を実行する者達が集まり、打ち合わせた。
そこにいる人物は以下のようだった。

ミシヒロ＝ヒラヌマ、谷最南の集落の代表。

コースケ＝コマツ 谷の農夫の青年。首長の娘の恋人。

カズヤ＝ノマ 谷隨一の運動能力を持つ男。

マサト＝ハエノ 谷の地理に詳しい。

「というわけで、皆さんに集まつてもらつたわけだが。」

ヒラヌマが、話を切り出した。この作戦チームのリーダーらしい。
「あの～、あなた方ならわかりますが、何で僕もなんですかね？」

コースケは、皆に問うた。

「お前さんは、若くて力があるだからだよ。」

そういって、ノマ、コースケをさし、ハエノがいった。

「その点、私は知識しかないからなあ。皆さんの足手まといにならんよう、せいぜい頑張ります。」

「足手まといなんて、そんな。」

ヒラヌマは、一応、笑つて首を振つて見せた。

「出発は、今日の深夜0時。敵は朝方、あの場所を通ると思われます。攻撃武器は、銃、その他。質問は？」

「別にねえよ」とノマ。

「特ないです」とハエノ。

「何時頃、帰れますか?」とコースケ。

「コースケ君。これは訓練じゃないんだ。作戦が終了すれば帰れる、失敗したら、一度と帰れない。それまでなんだよ。」

ヒラヌマはそういうと、そのまま黙ってしまった。

「そーですよねー・・・」

コースケも、この責務の重大さを、今更ながらに感じた。沈黙が流れた。その沈黙を破ったのは、ノマだった。

「でもよ、やるしかねえんだよ、俺ら、この谷、守るんだろ?」

彼の言葉は、重かった。

五 章 作 戦 前 編 (後書き)

またまた一部構成でお送りいたします・・・。
学生にとっての大きな障害、定期テストを完全に超越して書いております・・・。

六章 作戦 後編（前書き）

前編のあらすじ：

（新天地）軍が攻めてくる、そんな噂が谷中に広がっていた。その
ような中、奇襲攻撃が提案され、実行されることになった。

夜の暗闇は、谷を包んだ。しかし人々は、決して眠りに落ちることはなかつた。皆、不安と恐怖を感じていた。

時は既に、出発の時間を迎えていた。数人の男達が、南の集落の代表、ヒラヌマの家へと集合していた。

「失敗は許されない。とりあえず、指揮官らしき人物を発見したら、無線で報告してくれ。」

「そのあとはどうするんです?」「ースケが訪ねた。
「私が、ノマが、射撃するのみだ。リーダーさえ殺すことが出来れば、部隊も混乱するはずだ。しかしそれでは根本的な解決にはならないだろうがな・・まあ良い、では出発しようか。」

ヒラヌマが皆にそりそりと、一同はうなずき、そのまま目的地へと発つた。

目的地までは3キロほどの道のりであった。その間、皆、口を閉じたまま、無言に歩き続けた。一人一人がこの任務の重さに絶えていたのであつた。月夜は、彼らを照らし、大きな影をつくつた。

砂漠と谷の境界の、細い道は、左右を急な斜面で囲つていた。まるで、地上の楽園と外界を隔絶するかのようであつた。一行は、その道の終点近くの、斜面の茂みで、その時を待つことにした。そこから、南の方角も良く見渡せた。夜明けまで、まだ時間は幾分あつた。

「しかし、狭い道だな、おい。なんでこんなに狭いんだよ。」
ノマはこの道に、どうしようもない不満を呟いていた。

「この道はですね、我々の先祖があとからつくつた道のようですよ。そもそもこの道は谷と外を結ぶ唯一の通路ですから、この道がつく

られる前には、谷は完全に外界から遮断されていました。ここからは、私の推測の域に過ぎませんが、我々の先祖は、終末戦争時に、戦争の災難から逃れるために、この谷へ、道無き道を来たのではないかと思うんですよ。しかしながらですね、いくら周りが遮断されているとはいって、空には何の遮りをありませんからね、どうやって災難を逃れたのかは、不明ですけど。」

ハエノはそう持論を開いた。コースケは谷の歴史に興味を持ち、さらに質問した。というよりもむしろ、これから起る事への緊張を、幾分かは紛らわそうとしたのである。

「なんで、そういうことは、先祖代々伝えられなかつたんでしょうね。」

「うーむ、私も長年研究していますが、全くといってそのような記録は出ません。」

「あのキヌコの婆なら知ってるんじゃねーの?」

三人は谷の歴史の会話を続けていた。しかしその間も、時は刻々と、その時を刻んでいた。

その時、ヒラヌマが口を挟んだ。

「その話だがな、実はずつとそのことが伝わっている家があるんだ。谷の秘密について、な。」

「そういう家があるとすれば、間違いなく首長の家でしょうね。あの家の先祖は代々首長をやつてるようですからね。違いますかね。」ハエノはすかさず答えた。

「その通り、あの家には代々その秘密が伝えられているらしい。もちろんいつさい外部流出は許されないようだ。」

「何なんですか、その秘密?」

コースケがそう質問した。

「我々には絶対わかり得ないんだ。しかしあそらく内容は、終末戦争時に、どう我々の先祖は生き延びたか、どうやって土地を荒廃させずに、豊かな自然を守り得たか、とかいうことなんじゃないか。ともかく今の我々には何の必要もないのでござる。ほらもうすぐ夜

が明ける。準備を始めようか。」

ヒラヌマはそういうと、作戦の準備に取りかかりだした。

そうかな、なにか今の俺たちに必要なことがある気がする。

コースケは、話を聞いて、そう思った。

この時期は、もう夜明けが遅くなっていた。目をやれば、東の彼方が、まだかすかにぼんやりと明るく見える程度である。

ふとコースケは、双眼鏡で南の方角を眺めた。するとそこには、出発しようとしている（新天地）軍の部隊があつた。初めて見る外の人間、だった。

「敵だ、敵が動き出そうとしていますよ、皆さん！」

そう聞くと、皆の間に、鋭い緊張が走った。それは、時が既に、すぐそこまで迫っていることを示していた。

大変更新が遅れてしまいました。しかしふさく更新しないと感覚を忘れてしまいます。これも全ては定期テストのせいであります。これからはまたペースを速めて、年内完結を目指に書いていきますのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0313d/>

真の大地

2010年12月29日08時45分発行